

# 「私の死」の論理

篠原 駿一郎

A Logical Analysis of "My Death"

Shun'ichiro SHINOHARA

## はじめに

愛する家族の死であれ親しい友人の死であれ、あるいはニュースで見聞きする所縁なき人の死であれ、他者の死は、さまざまな文学や芸術あるいはまた社会政策のテーマではあっても、私の理解する限りでの狭義の哲学のテーマではない。小論で問題にしたいのは、私の死、つまり自分自身の死、のことである。すなわち、ここでは、死がその主体に対して持つ意味だけを問題にしたいと思う。これこそが哲学的にもっとも興味深い問題であると思われるからである。

さて、自分自身の死というものは自己に起こる最悪の事態である、というのがごく一般的な考えであろう。しかもそれはいつかは受け入れなければならない事態でもある。そこで、できることならあまり死を見つめ過ぎずに日々の生活に没頭していたい、というのが多くのわれわれ凡人のありようである。「太陽も死もじっと見つめることができない」(ロシュフコー)からである。しかしながら、一方で、また多くの人たちが、とりわけ哲学者たちや文学者や宗教家たちが、死を強く意識し死を忘れずに(メメント・モリ)そして死について考えてきたことも事実である。そしてかれらは、死を積極的に生の中に位置づけ、認識によってあるいは修練によって心の中における死の克服を目指してきたのである。

そのような哲学的な思索の伝統の一つが、「われわれの死は自分自身には無関係である」という議論である。たとえば、快樂主義で有名なギリシャの哲学者エピクロスは「死は、もろもろの悪いもののうちで最も恐ろしいものとされているが、実はわれわれにとって何ものでもないのである。なぜかといえば、われわれが存在するかぎり、死は現に存在せず、死が現に存在するときには、もはやわれわれは存在しないからである」(メノイケウス宛の手紙)と述べている。エピキュリアンであったローマのルクレティウスも「本当に死んでいるのならば、もう一人の別の自分がいるわけではないのだから、生きたままで自分の喪失を嘆くことなどできはしないのに、どうしてそんなことが分からないのか」(物の本性について)として死を嘆くことは愚かしいことであると言う。さらに時代を下れば、モンテーニュも「死は、きみたちが死んでいても生きていても、きみたちに関係がない。な

ぜならば、生きているならばきみたちは生きているのだし、死んでいるのならばきみたちはもう生きていないのだから」（エッセー第20章）と述べている。

時代を貫くこの思索の伝統は、これらの哲学者たちが死を人生最大の難問の一つとみなしたことの表われであり、死のレッスンをとおして心の平静を得ようとしたかれらの理性的葛藤を跡付けるものであろう。要するにかれらが言っていることは、自分自身の死は自分には関係がない、したがってそれを嘆き悲しむことはない、ということである。

これは、しかし、考えてみればパラドクシカルでパズリングな主張である。そして、一方では、多くの思索家たちがこのような言明を詭弁とさえみなしてきたのもまた事実である。なぜならば、われわれは、このような主張そのものがそうであるように、明らかに自分の死に大いなる関心を持っているし、もっと積極的に言えば、死を考えることなしに生もありえないと思われるからである。小論はこの議論の組み立てを論理的に分析しそのパラドックスあるいはパズルを分析してみようとするものである。

### 死を経験することはできない

さて、この死を恐れずに魂の平静を求める論理の組み立てには些かの誤りもないように思われる。そのことを、この論理を形式化することによって見てみよう。

まず、エピクロスが、

われわれが存在するかぎり、死は現に存在せず、死が現に存在するときには、もはやわれわれは存在しない

と言うときに、「われわれが存在する」とは「われわれが生きている（死んでいない）」ということであろう。次に、「死は存在しない」とは、「（われわれは）（自分の）死を経験しない」と考えられる。したがってこのエピクロスの命題は、

われわれが死んでいないならば自分の死を経験していないし、自分の死を経験しているならばわれわれは死んでいる

ということになる。さらに、この命題の前半と後半は対偶関係にある二つの命題と考えることができる。原判断が真ならばその対偶は真になるので、結局この二命題は、

われわれが死んでいないならば自分の死を経験していない

という一つの含意命題と同じことである。これは「われわれが病気でないならば自分の病氣を経験していない」という含意命題と同様に定義的に自明のことであろう。そうであるならば、これは同値命題でもあるということである。すなわち、病気でないということは病氣を経験していないことを意味しており、それと同様に、死んでいないということは死を経験してはいないことを意味しているのである。このことが議論全体の最初の前提になる。この前提は上記のモンテーニュの文にも認められる。

前提① 死んでいないということは死を経験していないということである

しかしながら、このような定義的真理からだけではいかなる事実的真理も導かれぬ。それは、「病気でないということは病氣を経験していないということである」ということからいかなる事実的真理も導かれぬのと同じである。したがって、ここではエピクロスの推論に次のような命題を前提として補ってやらねばならない。すなわち、

前提② われわれは死ねば何も経験しない

実は、エピクロスは上記の引用箇所少し前で、「死は感覚の欠如である」と述べている

が、これは前提②と考えていいであろう。形式的に論じるためにはこの前提が必要である。この前提②は、上記のルクレティウスの主張にも示されていると言えるだろう。そしてかれらが得ようとした結論は、次の結論である。

結論① われわれは死を経験することはない

この結論は、エピクロスが、

死はわれわれにとって何ものでもない

と表現し、モンテーニュが、

死は、きみたちが死んでいても生きていても、きみたちに関係がない。

と言ったことのうちに表現されていることであろう。

もとより、小論はこれらの哲学者たちのテキストを正確に読み取り、その文脈の中でのそれらの発言の意図を検証しようというものではない。また、現代論理的観点からは、こういう哲学者たちの発言の形式化は必ずしも一義的に決定できないかもしれないが、このような前提①②と結論①への解釈は、「少なくとも一つの正しい解釈」ではありえると思われるし、これと同様の思索の伝統を一般的に論じるには正当化できる解釈と思われる。

そこでこれらの前提と結論を記号化してみる。まず、次のように述語関数と主語を定める。ただし、 $x$ と $y$ は変数で $a$ は任意の名前とする。

$D x$  ……  $x$ は死んでいる  
 $E x y$  ……  $x$ は $y$ を経験する  
 $H x$  ……  $x$ は人である  
 $d$  …… 自分の死

これらの記号を用いれば上記の前提と結論は次のようになる。

前提①'  $\forall x (\neg D x \Leftrightarrow \neg E x d)$

前提②'  $\forall x (H x \Rightarrow (D x \Rightarrow \forall y \neg E x y))$

結論①'  $\forall x (H x \Rightarrow \neg E x d)$

ここで平均的なシステム（たとえばE. J. LemmonのBeginning Logic）を使って前提①と前提②から結論①を導出してみる。

1	(1) $\forall x (\neg D x \Leftrightarrow \neg E x d)$	A (Assumption)
2	(2) $\forall x (H x \Rightarrow (D x \Rightarrow \forall y \neg E x y))$	A
1	(3) $(\neg D a \Leftrightarrow \neg E a d)$	1 UE (Universal Quantifier Elimination)
1	(4) $(\neg D a \Rightarrow \neg E a d) \wedge (\neg E a d \Rightarrow \neg D a)$	3 Def. $\Leftrightarrow$
1	(5) $\neg D a \Rightarrow \neg E a d$	4 $\wedge E$ ( $\wedge$ Elimination)
2	(6) $H a \Rightarrow (D a \Rightarrow \forall y \neg E a y)$	2 UE
7	(7) $H a$	A
2,7	(8) $D a \Rightarrow \forall y \neg E a y$	6,7 MPP (Modus Ponendo Ponens)
9	(9) $E a d$	A
9	(10) $\neg \neg E a d$	9 DN (Double Negation)
1,9	(11) $\neg \neg D a$	5,10 MTT (Modus Tollendo Tollens)

1,9	(12) Da	11 DN
1,2,7,9	(13) $\forall y \neg Eay$	8,12 MPP
1,2,7,9	(14) $\neg Ead$	13 UE
1,2,7,9	(15) $Ead \wedge \neg Ead$	9,14 $\wedge I$ ( $\wedge$ Introduction)
1,2,7	(16) $\neg Ead$	9,15 RAA (Reductio ad Absurdum)
1,2	(17) $Ha \Rightarrow \neg Ead$	7,16 CP (Conditional Proof)
1,2	(18) $\forall x (Hx \Rightarrow \neg Exd)$	14 UI (Universal Quantifier Introduction)

この最後の行の式は、

$$\neg \exists x (Hx \wedge Exd)$$

と同値である。すなわち、結論は、

自分の死を経験するものはいない

と言い換えてもよい。これで、

死ぬことは自分の死を経験することであるが、われわれは死ねば何も経験できないという前提から、

われわれはだれも死を経験しない (死を経験するものはいない)

という結論が導出された。これを修辭的な表現に変えれば、まさに、

われわれは死を経験することはできない

ということになる。

### 死を恐れるのは愚かである

さて、これらの哲学者たちにとっては、死を恐れずに魂の平静を得ることがなによりも重要なのである。そこで、さらに推論を進めて死への恐れを否定するような結論を導くには、前提として、

前提③ 何かを恐れるならばそれを経験している

を付け加えなければならない。これは、恐れることは一種の経験であるということであり、また、経験とは恐れのようなものも含む精神的な活動である、ということであるから自明の真理であるように思われる。これは上記のエピクロスやルクレティウスの言からも読み取ることができる。そこで、次の述語関数、

$Fxy$  ……  $x$ は $y$ を恐れる

を追加して、

前提③'  $\forall x \forall y (Fxy \Rightarrow Exy)$

が得られる。そこで前提①から③までを用いて、

結論② われわれはだれも自分の死を恐れない

結論②'  $\forall x (Hx \Rightarrow \neg Fxd)$

が導かれなければならない。上記の証明の行(18)の結論を得ずに行(16)から証明を継続する。

1,2,7	(16) $\neg Ead$	9,15 RAA
17	(17) $\forall x \forall y (Fxy \Rightarrow Exy)$	A

17	(18) $\forall y (Fay \Rightarrow Eay)$	17 UE
17	(19) $Fad \Rightarrow Ead$	18 UE
1,2,7,17	(20) $\neg Fad$	16,19 MTT
1,2,17	(21) $Ha \Rightarrow \neg Fad$	7,20 CP
1,2,17	(22) $\forall x (Hx \Rightarrow \neg Fxd)$	21 UI

これで証明は完成した。この結論は、

$$\neg \exists x (Hx \wedge Fxd)$$

自分の死を恐れるものはいない

とも同値である。

ここでもう一度まとめてみると、上記の哲学者たちが、「自分の死を恐れ悲しむことは愚かなことである」と論じた議論は、次の推論を健全（妥当）と考えたからである。

前提① 死んでいないということは自分の死を経験していないということである

前提② われわれは死ねば何も経験しない

前提③ 何かを恐れるならばそれを経験している

結論② われわれは自分の死を恐れない（自分の死を恐れるものはいない）

そして、この推論は上に証明したように健全である。そもそも推論が健全であるということは、前提がすべて真であるならば結論が必然的に真になるということである。しかしながら推論が健全であるということから直ちに結論が正しい（真である）ということにはならない。その結論の正しさが保証されるのは、推論の健全性に加えてさらにある条件が満たされる時のみである。その条件とは、前提がすべて正しいということである。つまり上記の証明によってこの推論の健全さが証明されたので、もし前提の①から③までが正しいならばこの結論の正しさが保証される、ということである。そこで、これから前提の正しさを検討してみよう。

前提①は、前にも述べたように、確かに定義的な真理であろう。死んでいないのに自分の死を経験しているということは論理的に矛盾することである。よく話題になる臨死体験というのはどうなのだろう。これはわれわれが隣の部屋を覗くみたいに生きてまま死後の世界を垣間見たのであろうか。もしそうだとすると、われわれは生きているのであるからやはり死を経験したとは言えない。このような臨死体験をいくら重ねてもそれは死そのものの経験ではない。結局、前提①は論理的な定義として正しいとせざるを得ないと思われる。

次に前提②はどうであろう。われわれは死ねば何も経験しないのであろうか。これに答えるのは簡単ではない。一つは「死」というものの定義に依存するからである。もし「死」が一切の終焉を意味するのならば前提②の正しさは定義的なものである。しかしながらわれわれはこの世での生を終えて後あの世で新たな生を送るという考え方もある。しばしば、「科学は来世の存在を否定している」と考えられるようだがそれは正確ではない。科学はそのようなことを問題にすることができないというのが正しい。つまり科学は来世の存在を肯定できないが否定もできないのである。来世が存在するかどうか、存在するとしたらどのようなものか、来世でのわれわれの生活や精神活動はどのようなものであるかといったことは、科学のテーマにはなり得ない。それらはわれわれの信仰や信念の問題である。そのような存在を信ずるもよし信ぜざるもよし、あるいは死んでからの楽しみというこ

とでもよい。いずれにしても証明したり反証したりするような問題ではない。

現代人の多くは、少なからず、科学信仰に陥っており、「死ねばすべてが終わりである」と信じているような発言をする。つまり、科学的に理解できないものは知識とは言えないとまで思い込まされている。しかし、その一方で、相変わらず宗教的な、ということは死者の冥土での存在を前提したような法事を行ったり、神社仏閣に参拝するといった宗教的な振る舞いをしている。もちろん、はっきりとした信仰を持ち来世の存在を確信している人もいる。あるいは先に言及した臨死体験にしても、生きたまま死を覗いたのではなく、いったん死んでからこの世に戻ってきてその体験を語っているのだ、と考える人もあろう。

いずれにしても来世の存在や死後の生の存在は、生きているわれわれに証明できるようなことではない。ここに登場してくる哲学者たちはそれぞれにある意味で理性的で唯物論的でもあったので、この前提②のように死ねば魂も分解しすべてが終わりであると考えたのである。小論でも、死後の生についての問題は排除しておきたい。すなわち、「死とは一切が無に帰すことである」と理解した上で、それでもわれわれはなぜ自分の死を問題にし恐れるのかという問に焦点を合わせたいからである。事実、現代人の多くは、一方で、そのように死によってすべてが失われると言いつつも、やはりもう一方で死を恐れていると言えるであろう。そうすると前提②はやはり論理的なあるいは定義的な真理として受け入れるということになるのである。

そこで残されたのは前提③である。既に見たように、前提①と②が定義的に正しいのであるから、残された前提③が正しいならば結論②も正しい、ということになる。推論全体の健全性は保証されているからである。死を経験できないと説くこの哲学者たちが、したがって、死を恐れることの愚を言うためには、前提③の正しさを主張しなければならないし、事実そう主張しているのである。この合理主義者たちは、前提③に示されるように、われわれの恐れは経験の一種であり、経験もしないことを恐れることはないと考えたのである。だからこそ必然的に、自分の死を恐れることはないという結論を導いたのである。

たしかに、われわれは、たとえば病気や貧困を恐れる。それはそのようなものに陥った時、すなわちそのようなことを経験した時の苦しみを恐れるからである。ところが自分の死というようなものは、それらの病気や貧窮と違って、経験することができない。それでもなおそれを恐れるということはわれわれの誤解であろう。つまり自分の死を恐れるというのは誤った思いであり、そのようなことに思いを致すことはせん無きことなのである。それらは克服すべき人間の蒙昧である。これが、これまで問題にしてきた哲学者たちの議論の心髄である。

もちろんわれわれにこの哲学者ほどの精神力があれば、これはこれで一つの叡智であり死の克服法であるかもしれない。われわれは死を経験できないのであるから恐れることはできないしその必要もない。仕事に専念し、人を愛し、また病に倒れたり貧窮に陥ればその苦痛や障害の除去に努めることだけを考えていればよい。所詮、生きている間は生きているのであり、そこに死は存在しない。そして死が訪れば、もはやそこには嘆き悲しむべき死さえも存在しないのである。かつて、ある木彫家の生きざまが紹介されたことがある。かれは百歳になんなんとする年齢であったがすこぶる元気で、かれの仕事場の庭には、これから彫るべき数十年分の木材が乾燥のために積まれていたそうである。かれがこれから数十年生きるつもりであったのか死のことを忘れていたのかは伝えられていないが、常

識的な寿命を考えないこうした生き方も一つの知恵であろう。

いずれにしてもわれわれが死を恐れない魂の平静を獲得したいならば、すなわち結論②を得たいのならば、恐れは経験であるということ、したがって、経験できもしないことを恐れることはできないということ、すなわち前提③を受け入れるように自分自身を納得させるべく修練を積むほかはない。

### それでもなぜ死を恐れるのか

さて、上で健全性を証明した推論からはもう少し異なった論点を引き出すこともできる。それはこういうことである。結論は正しくない、したがって前提③は正しくないということである。われわれが死を恐れるということは少なくともわれわれ人間にとって極めて自然で普通のことと思われる。人類の歴史において、その宗教や文化を見ても分かる通り死への恐怖は極めて普遍的なことであろう。だからこの結論は正しいとは思われない。そうであるならば、この推論が健全である以上、前提③は間違っていないなければならない。もちろん、前提③が間違っているからといって結論②が正しくないということは導かれないけれども、結論を否定するためにはこの前提を否定することが必要条件である。

当該前提は、

前提③ 何かを恐れるならばそれを経験している

前提③'  $\forall x \forall y (F x y \Rightarrow E x y)$

であるから、これを否定するという事は、次の命題、

命題① 何かを恐れるならばそれを経験している、ということはない

命題①'  $\neg \forall x \forall y (F x y \Rightarrow E x y)$

を肯定することである。これらの命題は、

経験しないが恐れるようなものがある

$\exists x \exists y (\neg E x y \wedge F x y)$

と同値である。

これは、要するに、われわれは経験しないようなことでも恐れることがある、ということの意味している。われわれは直接的に経験もできないものに恐れを抱くことがある、ということが正当化できるならば、あるいはそれを肯定できるもっともな理由があるならば、前提③は否定される、つまり命題①が肯定されることになり、したがって、経験できない死を恐れることを愚だとする論理を退けることができるであろう。

さて、たしかにわれわれが被る不幸の多くはわれわれ自身が直接に経験できるものである。貧窮や病苦などはその代表といえるであろう。家庭の経済や健康に留意しない生活を続けるということはいつの日か家計を破綻させ衣食に不自由し病気の苦しみを味わうという不幸な状態を招くかもしれない。これはわれわれが直接経験する不幸でありそれを恐れるのである。このように主体が直接経験できるであろうことを恐れるというのは最も一般的なわれわれの恐れ構造である。

しかしながら、もう少し考えてみると、このような恐れはわれわれの恐れの一部でしかないということに気がつくであろう。われわれは被せられる悪評や中傷を恐れるかもしれないが、それが大抵は風に乗せられていつかはわれわれの耳に到達するから恐れるのだろうか。人にだまされたり裏切られたりすることを恐れるかもしれないが、それはいつか

はそのことが明らかになって悲しい思いをするからであろうか。そうではあるまい。自分の耳に達しようが達しまいが、真実を知らされようが知らされまいが、そのような直接的経験の有無によってそのことが悪であったりなかったりするのではない。そのような人の自分に対する仕打ちがあるということが悪でありそれを恐れるのである。「私に対する悪評は教えないでくれ」とか「最後までだまして欲しかった」というのは実践的な知恵かもしれないが悪評や騙しの悪を減じるものではないだろう。

一般的に論じれば、われわれの悪を経験する主体というのは、単にその悪が生じている時間的な制約の中にあるわけではないということである。逆に言うと、われわれに被せられる悪というものは時間的制約の中にある身体的な私自身にだけ及ぶというのではないということでもある。われわれの主体というものは常に普遍的な時間と空間に浸透しているものなのである。われわれに対する悪は身体的な制約を持つわれわれの感覚には到達しないことがあるかもしれないけれども、われわれへの悪そのものはわれわれの主体が浸透した世界そのものに対して被せられた悪なのである。この世界にあってこの世界を体験している主体というのは、本質的に身体的な時間の制約を超えたものなのである。ある意味ではそのような主体、私自身、というのは世界そのものである。そのようなものとしてわれわれの主体は構成されているのである。

これはわれわれの精神構造が本質的に唯我論（ソリプシズム）的な傾向を持っていることを示している。この傾向を徹底すれば唯我論哲学が成立するのであろうがわれわれの自然な性向はそれほど徹底したものではない。唯我論的性向と共に自分を多数の個人のうちの一人であると考える性向も併せ持っているのはもちろんである。しかしながらここで注目すべきは唯我論的性向の方である。われわれは自分という個人の境遇に関心があるだけでなく、常にこの自分が属する世界そのものの様態にも関心を払うものである。われわれは自分自身が不幸になることを好まないけれども、同時にわれわれの世界の有り様をも好ましいものにしたいと思うのである。

だからこそ、われわれは自身に降りかかる直接的不幸を恐れるだけでなく、たとえ自分に経験できない不幸であっても、それがわれわれ自身に関する不幸である場合には、それはわれわれの世界に被せられる不幸として恐れるのである。たとえば、あなたの死後、あなたの名誉が著しく損なわれる可能性があるかと仮定してみよう。あなたはその不幸を経験できない。しかしもちろんあなたはそのような事態を恐れ、生きているうちに手を打っておきたいと思うであろう。それは、そのようにあなたの名誉が毀損される世界の到来を恐れるからである。その世界にあなた自身が存在せずその不幸をあなたが経験できないにもかかわらず恐れるのである。

このように考えてくると、自分自身の死を恐れるということは、もともと自分がそれを経験できるからというのではなかったのである。それは、自分が死んだ後の世界、自分の身体が参加していない世界を思うことの恐れである。われわれは楽しみにしていたパーティーに参加できなくなった時、自分がいないパーティーを思い浮かべ、楽しかったはずのいろいろなことを経験できなかったことを残念に思うであろう。それとアナログカルに、われわれが死んだ時のことを考え、この世に生きて存在していれば直接的に経験したであろうさまざまなことからの喪失を嘆かわしく思うのではないか。もちろんあるパーティーへの不参加の残念さは次のパーティには参加できるかもしれないという可能性によって慰めら



れるかもしれない。しかし死はこの世界というパーティーへの参加の可能性を永遠に失うことであるから、そこには自らを慰めるべきいかなるすべもない。その慰める方途の喪失が恐れにまでなるのである。

## おわりに

さて、エピクロスに始まり一つの伝統となった「死はわれわれには無関係である、それを恐れることは無意味である」という思索の論理は正しかったのであろうか。

この推論の結論はある意味では正しいと言えるかもしれない。ただし、その前提③の正しさを自分に納得させることができたらの話である。つまり、「経験できないことを恐れること」をたとえば修練によって否定できるならば死への恐れを克服できるかもしれない。しかしその場合には、この人生におけるわれわれの恐れというものはかなり限定されたものとなる。すなわちわれわれがこの人生において恐れ気遣うことからは、直接的に経験できるものだけということになる。われわれに被せられる悪や不幸というのはそれをわれわれが経験できるときだけであるから「知らぬが仏」というのは文字どおり真実になり、自分に不利な情報に対してはうまく耳をふさぐことができるかどうかが重要になる。この場合には死を恐れることはもちろん意味のないことになるが、それだけではなく、自分の死後の世界のことを気遣うこと、たとえば家族のために生命保険にかかることなども無意味になるだろう。しかし、このような境地はわれわれ自身に魂の平静をもたらすことができたとしても、はたしてわれわれの平凡な社会生活を成立させる境地であるかどうかは疑わしいであろう。

したがって、このエピクロスの思索の論理はもちろん間違いとも言える。それは、まず、われわれが死への恐怖という現実を持っているという事実によって反証されている。それがこの論理が引きずってきた詭弁という汚名の理由であろう。そしてこの死への恐れを故あるものとするためには、少なくとも、経験できないものへの恐れを持つというわれわれの性向の正当性を受け入れなければならない。これはすでに詳しく論じたように人間の自然な性向である。それはわれわれが世界を時空を超えた全体として眺めるという唯我論的性向である。ゲーテを始めフロイトやその他の思想家たちが「われわれは自分自身の非存在（死）を考えることは不可能である」と主張したことはよく知られているが、それはこのような人間の唯我論的性向を述べたものと思われる。われわれは自分自身の死を考えたときにはいつもそれを考えている第二の自分を想定するからである。そして、この時の第二の自分というのはまさに世界そのものでしかありえないであろう。

そうであるならば、われわれは、いかにしても自分が存在しない世界を考えることはできないのであろうか。そのような思考はもはや「世界そのものが存在しないことを考える」という極限的思考であり、そのような思考にいかなる意味があると言えるのであろうか。あるいはそもそもそのようなことを考える能力がわれわれに与えられているかどうか、それは極めて疑わしいと言わざるを得ないであろう。